

## 1630 T.S 東京見学会感想文

仙台第二高等学校

私は今将来の夢が決まっていない。自分に何が向いているのか、何ができるのかなどもわからない。好きなことはあるが、仕事には関連付けられない。そんな中周りの友達が自分の夢をしっかりと持っているのを見て、不安は大きくなっていかばかりだった。しかし、今回の東京見学会を通して私の考え方は大きく変わった。

私が東京見学会に参加した理由は「日本を引っ張って行っている人に話を聞きたい」と思ったからだ。日本を引っ張って行っている人は高校生るとき何をしていたのか、今のうちにやっておくべきことは何かを直接聞いてみたかった。今回の見学会ではまさにそのような方々から話を聞くことができた。

1日目の始めは笹川平和財団を始めとする財団の方々との談話会だった。ここでは全体の目標である「これからのエネルギー」については勿論、メンバーの方々一人一人がまったく違う分野の経歴を持っていて、とても広い視点から話を聞くことができた。日本の現状や今後の対策などの話も非常に興味深かったのだが、私が特に惹かれたのは富永さんと日高さんの話だ。

はじめに現在フォトグラファーをしている富永さん。高校生の頃フォトグラファーになろうとは思っていなかったらしい。大学も写真とは関係のない文学部に進んだという。就職に迷っていた時母に「手に職をつけたらいい」と助言をもらい、せっかくなら自分が好きな写真を極めようという軽い気持ちで写真学校へ。そうして遠回りしつつも写真の業界に入って行った。写真を撮る中で被写体の方とのコミュニケーションも必要となり、話術も身につけたそうだ。富永さんは「今（高校生）のうちに将来の夢なんて決まっても問題はないから、何事も全力でやりなさい。必ずその分は返ってくるから」と力強く助言してくださった。

次にハンセン病の支援関係の仕事をしていたことがあるという日高さん。日高さんはハンセン病とそれを通して見た外国のことを教えてくださった。私が驚いたのはハンセン病が薬で完治するということだ。しかし治ればその後感染などの心配はないのにもかかわらず、昔の差別を引きずり「完治する」ということが広く認知されていないため隔離から元患者が帰れていない。日高さんはこの誤解を解くための運動をしていたそうだ。訪れた中国の隔離村には日本

人患者と一緒に暮らしていたのだが、やはり最初は壁があったという。そこで日高さん一同はお互いが分かり合えるようにするため運動会を企画した。運動会は大成功。勝ったら国に関係なくハイタッチ、ハグなどをして全力で楽しめたという。最後に「こんな企画をしてくれてありがとう」と言われた時の達成感は何者にもかえがたい素晴らしいものだったと語ってくださった。日高さんも最初からハンセン病携わろうとしていたのではなく、大学の時に見たニュースに興味を惹かれ、そこから友達で紹介で中国まで行ったそう。「興味があればすぐ行動してみるのが一番。そうしていくうちに貴重な機会が訪れて道が見えてくる」とアドバイスしていただいた。

私は席の都合で四人の講師の方の話を聞くことができた。どの方も高校生の頃には今の職業に就くことなんて想像もしていなかったし、将来の夢も決まっていなかったという。四人の先生方は口を揃えて「高校生のうちは自分の好きなことを見つけて、それを伸ばしていくことが大切だ」とおっしゃっていた。私はまだ将来の夢が決まっていなくてもいいということに気づかされた。同時に好きなことを極めていけばいいのだと安心した。これらに気づいただけでもとても素晴らしい体験となった。

座談会が終わった後私の班は明日外務省に行くためこの時間に東大見学をすることになっていた。しかし東大に行くと思わぬ事態が待っていた。私は計数工学科を見学してみたかったのだがその時間にはもう終了してしまっていたのだ。他の模擬授業も全て終了していた。せっかくの機会を逃してしまったことはとても残念だったが、先輩方に話を聞くなど東大の雰囲気を肌で感じることでできとても参考になった。

そのままホテルに行き、夕食の後は二校のOB、OGの先輩方との座談会があった。私はこの座談会が一番多くのことを学べた。

最初に和知氏たちの班に来てくださったのは東大経済学部にいるという石井先輩だ。文Ⅲから文Ⅱへ移動したらしい。一年の頃の家庭学習は1.5～2時間で、塾にはかよっていなかった。石井先輩は最初東北大文学部志望だったが、模試の結果が良く先生にもっと上を目指さないかと言われたことがきっかけで東大を目指し始めたという。ちなみに二校時代は放送部だったそう。石井先輩が受験生の頃ちょうど震災でオープンキャンパスがなく、代わりに模擬授業があり、その授業の中でたまたま先生に当てられた。勿論習ったことのない大学範囲の質問なので分からなかったが、自分なりに仮説を立てて答えた。その

答えは外れていたのだがその時に先生が「お前は論理立てて考えられるから経済向いてんじゃない？」と言われたことがきっかけで経済学部に進むことを決めたい。数学克服方も教えてくださった。数学はセンスがないと時間がかかるのはしょうがない。センスがないならとりあえず解きまくることが大事。チャート1周目はとりあえず最初から最後まで通り、できなかったものに印をつける。2周目は印の付いている問題だけ解く。できなかったものにはまた印をつける…といった具合で何周もしていき、すべてできるようになるまでやる。これが結局一番いいとか。一周とただけでは勉強にはならないらしい。あと、睡眠の大切さは力説していた。12時には寝る。でないと次の日の勉強も頭に入らず悪循環になってしまう。他にもノートは授業を自分で再現せ切ることを目標にとるなどこれからの二校生活でのポイントをたくさん教えてくださった。

次に東大法学部の佐藤先輩がお話してくださった。驚くべきことに佐藤先輩は私と同じ広瀬中学校吹奏楽部出身だった。広瀬の吹部はとても忙しかったということもあり、二校でも最初は吹部に入っていたが自由な時間を増やすため10月で退部したという。一年生の頃の家庭学習時間は2~3時間、順位は20位前後だったとか。進研模試では上から順番に大学を書いていた。するとD、C判定が出たので「頑張ればいけるかもしれない」と思い東大を目指したという。高校の頃は実験がしたいと思っていたので東大には理系で入ったのだが「日本の中心にせっかく来たのだから、研究室にこもっているのではなく社会に関わりたい」と思うようになり、文転した。ちょうど法学部が穴場だった時期ということもあり60点代でいけたらしい。東大に入ってみてのアドバイスとして、「東大は一、二年で共用学をやるので自分の進みたい道が決まっている人はオススメできない。逆に道が決まっていない人にとっては広い世界を見ることが出来るから是非入るといい。」とアドバイスしてくださった。

三人目に来てくださったのは東大経済学部の伊澤先輩だ。伊澤先輩は中学校の時は不登校だったらしい。中学の夏休みまでに中学範囲は全て自分で終わらせていたのでいく必要を感じなかったからだとか…。現在は休学し、もともと親が日本酒を作っていたこともあり、自分で日本酒を売る会社を立ち上げているという。外務省のお墨付きでニューヨークに行ったり、海外でソムリエとして高級レストランで働いたりという経験をしたことも。そんな伊澤先輩が私たちに伝えてくださったことは「実質を見極める。自分がやりたいことをやり抜く。舞台は自分で用意する。」ということだ。自分のアイデンティティーを活か

し、他の人がまだやっていなくて自分なら強みを持っているものが狙い目。そういうものは案外身近に落ちているが、そういう良いポイントは気づきにくい。レットが普及した今の社会では物の流通だけを考えるのでは足りず、情報のルーツがとても重要。視野を常に拡大して自分自身を理解する。「誰かのため」だとより一層頑張ることができるらしい。モチベーションはなんでも良いのでとにかく全力で挑むことが何より大切だそう。もう起業しているという珍しい観点からのアドバイスはとても心に響いた。

どの先輩も「高校はとりあえず楽しむことが一番。好きなものを見つけてどんどん伸ばしていくといい」とおっしゃっていた。私はこの座談会でこの見学会に来る前に持っていた不安が消えたような気がした。

今回の見学会を通して私は最初に書いた「将来への不安」がとても軽くなった。そして「好きなことを存分に伸ばしていくことが大切だ」という言葉にも感銘を受けた。(勿論今回話を聞かせていただいた方々は勉強ができることを前提として話していたのだと思うが…)最近勉強に意味が見出せずグダグダと時間を過ごしてしまっていたのだが、勉強の意味も言葉にしてはつきりとは言えないが見えてきた気がする。今回学べたことはまだまだある。先輩方の話を活かしこれからは何事にも全力で取り組んでいこうと思う。

今回はこのような貴重な体験をありがとうございました。